医学図書館における分類上の諸問題

Some Problems on Book Classification in a Medical Library

独協医科大学図書館

平井 昭子 北村 聡 枝

飯島 正裕 篠原 巳貴子*

要 約

国立国会図書館印刷カード, LC カード, NLM Current Catalog, 出版年鑑等のチェックリストの整備, 刊行によって分類, 目録業務はかなり省力化されたが, まだ現実には多くの問題が残存している。分類業務を洗い直すためにまず使用分類表の検討から行うべく, 採用分類表の現状を調査した所, 日本においても米国においても NLMC 採用館が増加する一方であった。その原因はどのような点にあるのかを他の分類表と比較しつつ検討した結果, NLMC が医学図書の分類表として極めて優れており, また時代性にも適しているということがわかった。しかし, 最も優れた NLMC ではあっても, 日々発展を続けている現代医学に対応していくことは到底無理であり, MeSH の件名数の増加を参考にしてみても, そのギャップはかなり大きいものであることが推測出来る。そこで, 現実には惹起された分類上の問題点二例(分析化学の分類, 周産期医学の分類)を取上げて, チェックリスト上の分類方法を参考にしながら, その具体的処理方法の検討を行った。

1. はじめに
2. 分類表採用の現状
 - 2.1 日本における医学図書館の場合
 - 2.2 アメリカにおける医学図書館の場合
3. 主要分類表の特徴と比較
 - 3.1 対象分野
 - 3.2 構造の特徴
 - 3.3 検索効率
 - 3.4 展開性

3.5 更新性

3.6 チェックリストの有無

4. 分類表 (NLMC) と現代医学

4.1 MeSH における件名数の増加

4.2 分類表と新しい学問分野

5. 問題点の事例研究

5.1 分析化学における例

5.2 周産期医学における例

6. おわりに

1. はじめに

MARC II や OCLC によるめざましい図書目録の機械化と相互協力の発展は, 従来からの図書整理のあり方に様々な波紋を投げかけている。個々のカタログによる手作業からの脱却化, 分類の統一と目録記述の標準化等, 日本の図書館界が長年苦慮しながらも容易に越えることのできない問題に対して, 米国におけるそれらの先進的なシステムは, 将来への有力な指標を呈示していると言えよう。しかしながら, 現時点における日本の図書館界では図書整理面の相互協力は悲観的な要素も多く, OCLC に匹敵するだけのネットワークは無論の事, 目下開発中の JAPAN MARC にしてもその普及にはかなりの時間的経過と紆余曲折が予測される。

現在, 我々カタログの周辺では, 国立国会図書館印刷カード, LC カード, NLM Current Catalog, 出版年鑑等の, 図書分類を *Verify* するためのチェックリストが容易に入手出来得る状況にあり, また LC の CIP プログラムの進展等により以前に比べて分類作業にかかわる労力も大幅に軽減されたと言えよう。

一方, 特に医学系図書館においては, 情報の主体が単行書よりは雑誌に, サービスの重点が文献探索をはじめとする情報提供面に置かれ, 近代閲覧方式の頂点である完全自由接架システムの普遍化と相俟って, 旧来からの

* Akiko HIRAI, Masahiro IJIMA, Toshie KITAMURA, Mikiko SHINOHARA : Dokkyo University School of Medicine Library

単行書の分類, 目録業務はその方法と有効性について実務担当者でさえ測々たる疑問を払拭し得ない状態にあり, 今後の傾向として大胆な簡略化, 省略化の方向も考えられる。

しかし, 一概に医学図書館と言っても, その蔵書構成上から見た場合, 教養課程を含む医科大学図書館と専門課程のみの医学部図書館では自づと図書整備の守備範囲も異なるであろうし, カバー率やタイムラグの問題からも, それらのチェックリストが必ずしも一様に満足出来る状態にあるとは言い難い。ましてそこに付与された分類番号は各館の性質, 及び採用分類表の相違によって, そのままの形で *Verify* することが不可能な場合もある。また開架図書の分類にとって, 一冊の図書に単一の分類番号を与え, どこかしらの書架上に位置づけねばならないという宿命的な限界があり, 学問分野の多様化が著しい今日では, 単一の件名で図書全体の内容を包含することにはかなりの無理や不都合さが伴ってくる。加えて, 近年の医学の進歩は言うまでもなく, 急テンポで展開し絶えず分化と統合を繰り返していくのに対して, 一度採用された分類体系を変更することは非常に困難である。こうした状況の中でもともかくも我々は当面の間, 欧米諸国並みの図書館行政の充実, 機械化システムの普及と図書館相互のネットワークが根付くまでの路程として, 利用者のためにより良い検索手段としての分類, 目録の問題を, 実践的な方法で常にフォローアップしていかねばならない。そこで, 最近では機械化等一連の整理技術の省力化の陰に隠され, あまり取り上げられることなくなった, 古くて新しい図書分類上の諸問題に, より実務的な焦点を当て検討を行ってみた。

2. 分類表採用の現状

現在当館は三種類の分類表を併用している。即ち, 医学専門領域に対して NLMC (3版 1969), 関連領域である生物学, 動物学, 植物学, 及び人類学には NLMC と補充関係にある LCC の該当部分 (Class Q 5版 1967), 更に一般教養を含むそれ以外の領域に対しては NDC (新訂7版 1961) を使用している。書架検索上, 単行書の分類構成の良否は, 採用された分類表にすべてが課せられていると言っても過言ではない。そのために, 分類表の決定にあたってはいずれの館においても, 様々な角度からの検討が加味されることになる。幸いにも, 新設後間もない当館では採用分類表の決定に際し, 先輩諸館の長期に渡る使用経験から割出された実質的な長所, 短所を格好な材料とし, 更にその上に充分な検討を加えるこ

とができた訳であるが, 分類作業の諸問題を洗い直すために, どのような点が NLMC の選択を促す要因となったのかを再確認してみる必要があると思われる。そこで私達は, まず近年の医学図書館における分類表採用の動向から検討を始めていくことにした。

2.1 日本における医学図書館の場合

図1は, 現在 (1975年) と10年前の医学図書館協会加盟館における分類表の採用状態の比率を示している。この図に見られる最も著しい変化は, NLMC 採用館の大幅な増加であろう。1965年には協会加盟館49館あるなかで, NLMC 採用館は僅かに5館のみであるのに対し, 1975年の統計によると21館にも及んでいる。これは医学図書の分類に対して NDC を採用している館 (当館のように NDC を採用していても, 医学図書用の分類表として使用していない場合には採用館数には含まれていない) と比較した場合, 数値上では NDC 40館に対し NLMC 21館と約半数の比率ではあるが, その増加率は, NLMC 4.2倍, NDC 1.38倍, UDC 1.33倍, BMLC 0.75倍となっており, 他の分類表における増加率と比べると遙かに大きな差が見られる。更に, この10年間で新たに NLMC を採用した館16館の内訳を調べてみると, 次の通りであった。

- (1) 新加盟館 12館 (1965年より1975年までの新加盟館の総数は33館)
- (2) 他の分類表から NLMC に変更 4館
 - ①独自の分類表から NLMC に変更 2館
 - ②NDC から NLMC に変更 1館
 - ③BMLC から NLMC に変更 1館

以上の結果から, 採用分類表を決定するにあたって, NLMC 採用のメリットが大であると判断すべき要因二点が認められよう。一つには, 現在の NLMC 採用館の半数以上が新設加盟館であるということ。これは, 他館の使用経験から割出された主な分類表の評価を充分検討した結果, NLMC が使用上最も有効であると判断されたためであろう。もう一つには, 分類表変更という作業が非常な労力と時間を要する作業であるにもかかわらず, 他の分類表から NLMC に分類変更を行った館が4館あったこと。これは, NLMC の採用がそれらの労力に充分価する程の, 否, それ以上のメリットがあると考えられたためではないかと推測できる。

2.2 アメリカにおける医学図書館の場合

図2は, George Scheerer による米国内の医学図書館採用分類表の調査結果に基づいて, その比率と変遷をグ

図1. 日本における医学図書館(協会加盟館)
使用分類表の比率と変遷

図2. アメリカにおける医学図書館使用分類表
の比率を変遷

ラフ化したものである。ここにおいても、NLMCへの変更館の増加がより顕著に窺うことができる。

以上の二図から、近年の分類表採用の大きな特徴として NLMC 採用館が急激に増加しつつあるという現状を把握することが出来るが、その原因を探るにあたって、Scheerer が前述の調査において NLMC への変更館に対して行ったアンケートの結果を基に、以下の分類点をの三表変更の理由としてあげているのが注目される。

- (1)歴史的状況として古い医学分類表が取り残され、NLMC だけが時代性に適った分類表であること。
 - (2)NLMC と LCC との関連性が強く、この二つの分類表の使用が図書館に便宜を与えている。
 - (3)国家的集中目録作業に依存することにより、専門業務の重複を避け、経費を節減することができる。
- (2)(3)の項目については説明の余地は無いと思うが、(1)に指摘された「NLMC だけが時代性に適った分類表である。」という点について、その評価の基となった長所は何か、またそれは他の分類表と比較した場合、どのような点で優っているのかを更に具体的に検討してみたい。

3. 主要分類表の特徴と比較

各種の分類表の評価については、従来多くの図書館員等により、種々の貴重な検討がなされているので⁽²⁾⁻⁽¹¹⁾、今回は個々の分類表についての詳細な比較は省略するが、今日までに出されているそれらの評価を基にして、その概略をまとめてみた(表1)。簡略な言葉や記号で多くの内容を表示するという試みには弊害も少くないであろう

表1 主要分類表比較一覧

項目 分類表名	対象分野	構造の特徴	検索効率	展開性	更新性	チェックリスト	分類記号法 (小児科学概論)
NLMC	医学 基礎臨床	身体系・各器官 を優先	○	○	○	NLM Current Catalog CIP Data	非十進式 (WS 100)
BMLC	医学とその他の 学問全般	身体系・各器官 を優先	◎	×	×	なし	非十進式 (26 A)
NDC	学 問 全 般	学問体系に準拠	△	△	△	国立国会図書館 印刷カード 出版ニュース 出版年鑑	十進式 (493.7)
UDC	科学とその他の 学問全般	学問体系に準拠	×	△	○	なし	十進式 (616—013.2)
DC	学 問 全 般	学問体系に準拠	△	△	○	LC カード CIP Data	十進式 (618.9)

が、それぞれの分類表が有している特徴の概要を把握するには、比較的容易な方法ではないと思われる。対象とする分類表は、現在日本の医学図書館で主に使用されている NLMC, BMLC, NDC, UDC, DC の 5 種である。

3.1 対象分野

医学用分類表であるか、一般用分類表であるかを明示したものである。これは分類表自体が有する特性というよりは、むしろ採用館の性質や規模によって使用上の便、不便が左右されるものであるから、館の事情が異なることにより、評価も変動する。そのためもあってか、分類表の優劣を比較する対象としてはあまり取り上げられない項目であるが、当館のような一般教養課程の図書を含む医学図書館が医学用分類表を採用する場合には、医学外分野に対して、他の分類表の併用を余儀無くされ、そこから惹起される障害(例えば、境界領域における分類表間の項目内容の重複等)は、存外見逃せないものであり、配慮すべき側面も多々残されている。

3.2 構造の特徴

分類表の特性を考える上で、最も重要な要素ではないかと思われる。何故なら、これに従って蔵書の分類構成が定まる訳であるから、利用者側、図書館側の双方にと

り少しでも有効と思われる分類表を採用するためには、分類表の組織構造を充分理解し駆使していくことが必要となるからである。ここでは 5 種の分類表を、それぞれのもつ特徴のなかから、その相違が最大と思われる点に焦点をあてて、二つに大別してみた。

一方は、NDC, DC, UDC のように学問体系に分類体系を合致させているもの、他方は、その中でも特に同主題を扱った図書については同一カテゴリーの下に分類されるように、身体系・各器官を優先させている NLMC, BMLC である。特に後者は、書架分類上において、同一主題のものであってもバラバラに書架に分類配架されてしまう前者と比較した場合、非常に有効であることが容易に識別できるであろう(図 3)。NLMC 採用館の増加をもたらした素因の一つには、新しい図書館造りの気運に伴って生じた、開架式システムの導入とその普及とに密接な関連があったと推測することができる。

3.3 検索効率

利用者が目的とする図書に到達するまでの効率を比較したものである。図書に対するアプローチの方法は、大きく、目録上と書架上からの二つがあげられるが、開架式の図書館においては利用者の多くが後者の方法をたど

図3. NLMC と NDC による呼吸器系の分類

と考えられる。その場合、符号の簡潔性が検索上の最も重要なポイントにはなっても、単にそれのみならず、前項の分類表の組織構造が大きな要素として含まれてくることを忘れてはならない。

3.4 展開性

分類表の展開性という点については、既に言い尽されている感があるので極く簡単に止めたい。BMLCは、長所として簡易記号法ということが言われているが、その反面主題の展開性と精密な分類に欠ける弱点がある。NDC, DC, UDCにおいては十進式を取り入れているために十分な展開の可能性はあっても、そこには9区分(総記を含めると10区分)という限界が伴っており、時には構成上に不自然さを来す場合もある。その点、NLMCはアルファベットと数字の組合せで、各項目間にも幅があり柔軟性にも富む、というのが汎論である。

3.5 更新性

分類表にとって欠かせない要素の一つに、*up-to-date*な情報をどの程度盛り込んでいくことが可能か、という点があげられるが、ここでは主として改訂版の発行状態、追補情况等について調査を行った。

5種の分類表のうち、最も時間的遅れの甚だしいのがBMLCで、1955年刊行の第3版改訂版が現在使用されている最新版ということになり、それ以降の改訂、追補はなされていない。NDCは1929年に初版が刊行されて以来、1942年5版発行に至るまで3～4年の間隔で改訂版が出されて来たが、近年その間隔は非常に長くなっており、6版(1950)が刊行されるまでに8年、7版(1961)が刊行されるまでには約10年の隔たりがある。間もなく8版が出される予定ではあるが、現在はまだ新訂7版(1961)が最新版として使用されており、既に14年がたっていることを考えると、日進月歩の医学情報を相手取る我々にとって、最早古きの感は免れ得ない。

DC, UDCについては、不定期的に改訂版が出されているが、その間隔はNDCより比較的短く、UDCにおける部分的な改訂や補足はニュース形式の印刷物で世界中に流布されている。NLMCは、創刊された時期(1951)が他の分類表に比べて若いということもあって内容的に比較的新しい上に毎年新項目の追加、補足等がなされており、5種の中では最も現代性を具備した分類表であると評されている。

3.6 チェックリストの有無

ここにあげた資料は、単行書を対象とした付与分類のVerify用のツールとして手軽に入手できる代表的な

ものである。これらのチェックリストの利用は、ScheererもNLMC変更への理由の一つに指摘したように、筆者もまた、今後の分類業務の発展性につながるものとして大きな役割を担っていると考える。しかし、チェックリスト自体に内蔵しているタイムラグ、カバー率等の問題、及び我々利用する側の問題等、まだまだ改善しなければならない面も多く残されており、今後どのような形で利用の拡大が促進されていくかが期待される。

4. 分類表(NLMC)と現代医学

主要分類表における比較と検討から、NLMC採用館の増加を促すべき要因ともなった利点の内容がどのようなものであったかを概ね掴むことが出来た。しかし、如何なる分類表であっても時間的な遅れは避け難く、果してどの程度医学の進歩に対応し得るかという問題は、NLMCのみならず、現在医学図書館で使用されているすべての分類表に附随する課題であろう。前述の更新性という比較項目の中で、最も*up-to-date*な分類表であると評価されたNLMCではあるが、その時間的な遅れについては必ずしも満足のものではない。そこで次に、MeSHの件名を参考にしつつ、NLMCと現代医学との対応性について考察してみたい。

4.1 MeSHにおける件名数の増加

図4は、1960年にMeSHが発行されて以来今日までの件名の増加と変遷を示したものであるが、創刊より1975年版に至るまでに、既に収録件名は倍以上にも及んでいる。これは医学の進歩のめざましさと、それに伴う資料の増加をまさに物語っていると言えよう。

各年度の新件名の内容を見ると、その時々医学界におけるトピックスの反映や、新開発分野、或いは従来まで整備不十分であった分野に対する用語増強の様子等が窺われる。松村氏の指摘にも「1965年には歯学関係の用語、1966年には看護学並びに医学教育と疫学の諸分野、1967年には行動心理学、1968年には保健衛生、遺伝学及び獣医関係の用語、そして1969年には心理学、精神医学関係の用語が増加された。」とある。⁽¹²⁾ また、ここ2, 3年の傾向としては化学物質、薬物関係用語の急激な増加が目立っている。

次に1975年MeSHのサブカテゴリーの変化を見てみると、「総数 101, 新規サブカテゴリー 54(新設8, 分割されてサブカテゴリーになったもの 46)であり、旧サブカテゴリー数65に比べ全体として約1.6倍の増加率を示している。」⁽¹³⁾

新設サブカテゴリーとは

図4. 1960—1957年に至る MeSH 件名数の推移

- D5 Environmental pollutants (環境汚染物質)
- D7 Reproductive control agents (生殖制御剤)
- D11 Growth substances, pigments, vitamins (生長物質, 色素, ビタミン)
- D19 Hematologic, gastric, renal agents (血液作用剤, 胃作用剤, 腎作用剤)
- D25 Biomedical and dental materials (医療材料, 歯科材料)
- E7 Equipment and supplies (医療機器, 医療用品)
- I2 Education (教育)
- I3 Human activities (人間の行動)

であり, ここにおいてもカテゴリー D (Chemical and drugs) の分野の増加が圧倒的に多いことがわかる。また D25 医療材料, 歯科材料, E7 医療機器, 医療用品の新設は, 従来まで各々異なる主題のカテゴリーの下に収められていたものが, その分野と開発と発展に伴って新たに増設されたものと思われるが, 学問分野を表す概念が研究の進歩と共に, 分化したり統合されたりしていく様子が窺われて興味深い事例である。

4.2 分類表と新しい学問分野

このように年々の研究の発展に伴って, 新しい用語や, 新しい学問の概念というものが次々と資料の中に取り入

医学図書館 22 巻 4 号 (75)

れられてくるのに対して, 既存のままの分類表を使用している我々カタログ側にとっては, 如何に改訂版や増補版で補うべく努力は払っても, そこに必然的に生じてくるギャップは憂慮すべき問題点の最たるものであり, それらを効率良く処理していくためには, チェックリストの活用や, MeSH を NLMC 索引の補助として有効に使用していくことが必要である。しかしまた, チェックリストを作成する側も, 時間的遅れの中で分類表を使用していかなばならないという点に関しては, 我々と同様の立場でもあり, チェックリスト上にも時折, 分類表が現状に適合しなくなった分野における困惑と混乱を見出すことができる。

分類表と現状の不適合状態には, 二つの場合が考えられる。一つには, 研究内容や技術が新分野に浸透していく, それが更に専門的な学問分野として分化されていく段階, もう一つには, 個々の独立した専門分野が統合されて包括的な新しい学問の概念が生まれてくる段階である。この二つの段階は, 言わば学問発展上の過渡期とも言うべき時期であり, それらの内容を包括する明確な概念が未だ定まっていない状態でもあるから, 分類表に従って既存の分類体系に当てはめるということになる, 的確な分類や統一性に欠ける恐れがでてくる。次に取上げる二例は, そうした面を図書館の内容に顕著に反映させている学問分野であると思われるが, 常に up-to-date な図書館として機能していくためには, 如何にしてそれらの問題をカバーしていけばよいかを, 例に即して検討してみたい。

5. 問題点の事例研究

5.1 分析化学における例

既に今日では, 分析化学における技術はその研究開発の進展に伴い, 様々な学問分野に浸透し応用されている。1974 年 9 号の「情報管理」紙上では, 「分析技術が多方面で利用され, その傾向は増々強くなっている。例えば大気汚染の分析, 食品分析, 生体試料の分析, 臨床化学的分析, 化学反応過程の解明, プロセス制御等への利用を含めて考えると相当数が各分野に分散していることが予想され, その傾向は今後も増々強くなるであろう。」と述べられている。⁽¹⁴⁾ 今回は, 分析化学の中でも特に文献数の多いと言われているクロマトグラフィーについて, その基礎と応用分野における図書の分類を例に取上げてみた。

NDC に則すれば, クロマトグラフィーの該当項目は 433 (分析化学) の下部概念に当たる 433.4 (クロマト

グラフィー分析)に収められる。しかし、その応用を扱った図書になると、当館内の整理段階において各分類担当者が与えた分類番号は、同一主題と見なされる図書であるにも拘らず、それぞれ異なるものであった。例えば「生化学におけるガスクロマトグラフィー」という図書の分類について考えられる項目は、QU 25: NLMC(Laboratory manuals 実験生化学)と433.4の二通りであるが、カタログが生化学の観点に立つか、若しくは分析化学の観点に立つかによって、その図書は全く異なる書架上に位置づけられてしまうことになる。

単一分類表の採用館では、こうした不統一はあまり見受けられないかも知れないが、当館のように二種以上の分類表を併用している館ではこの種のトラブルが惹起されることはしばしばである。そこで、日頃我々が分類・目録作業遂行上で規範とする NLM Current Catalog(以下 C.C. と略す)の中から、クロマトグラフィーとその応用分野についての分類傾向を探り、それを基として当館の分類方針を検討することにした。

図5は1974年までにC.C.にカタログされた図書のうち代表的なものを選出し、そこに見られる分類傾向に従い図式化を行なったものであるが、その特徴は以下のように集約される。

(1) 基礎的立場からクロマトグラフィーを扱っているものについては、QD 117: LC (Analytical chemistry), 或いは QD 271: LC (Organic analysis>Chromatographic analysis) のいずれか一方に収められている。これは NDC の433, または 433.4 に該当する項目であり、純粋化学の立場として妥当な項目と言えよう。

(2) クロマトグラフィーが臨床医学分野と基礎医学分野に応用されている場合の分類であるが、臨床医学の場合での応用については、応用されている個々の器官や物質の下に収められている。

[例]

- 1) Steroid analysis by gas liquid chromatography. → WK 150: NLMC (Endocrinology > Steroid hormone)
- 2) Gas chromatography—mass spectrometry in neurobiology. → WL 104 (Neurology > Neurochemistry)

(3) しかし、基礎医学の場合での応用については、分類方法に若干の混迷が見出された。薬学部門での応用は、全般的なものでも個々の薬物を扱っているものでも、一括して QV (Pharmacology) に収められているにも拘

らず、生化学部門においては、図4にも示される通り、生化学・生体医学への応用を全般的に扱っている図書は総じて QD 271 へ、個々の物質への応用を扱っている図書は QU (Biochemistry) 内の各々概当する物質名の下に分類されていることがわかる。

[例] 1. 薬学部門への応用

- 1) Pharmaceutical applications of thinlayer and paper chromatography. → QV 25 (Pharmacology > Laboratory manuals. Microscopic analysis)
- 2) Sorbtsiia i khromatografiia antibiotikov, → QV 350 (Pharmacology > Antibiotics)

[例] II. 生化学, 生体医学への応用

- 1) Biomedical applications of gas chromatography. → QD 271
- 2) Papier chromatographie der Zucker in der Klinik. → QD 271
- 3) Gas chromatographic analysis of fatty acid. → QU 90 (Biochemistry > Fatty acid)
- 4) Quantitative gas—liquid chromatography of amino acids in Proteins and biological substances. → QU 60 (Amino acid)

これら生化学部門内の応用図書の分類方法として、薬学部門の応用に従い、全般的なものも個々の物質についてのもを一括して生化学の項目下に収めることも考えられる。しかし、分類を行う立場から鑑みるに、一冊中に基礎とその応用分野とを含む図書をその含有する割合に応じていずれか一方に収めようとすれば、その時々々の観点の相違や判断の誤りから、同一内容を有する図書であっても基礎領域と応用分野領域との二ヶ所に各々分類配架されるという可能性が生じてくる。また利用者の立場から考慮すれば、応用分野の資料を求めている者がその書架に適当な図書を見出せなかった場合、基礎に立戻ってアプローチするということは多々あることで、恐らくその逆の場合よりも検索の効率は比較的高いであろうと思われる。

これらを考え合わせた結果、当館も C.C. の分類方針に習ってクロマトグラフィーの biomedical, biochemical な応用全般を扱った図書は、すべて 433.4 の一ヶ所にまとめて分類する方が利用者にとって多くの負担をかけずに書架上の混乱や分類の不統一を避け得ると判断した。しかしながら、生化学における実験法と、分析化学とは、どのように学問の専門化、細分化が進められようとも、やは

り切り離して考えることはできない分野であり、時には双方からのアプローチが必要とされるので、相互の参照板・参照カード等により案内の不備を補うべく努めている。

5.2 周産期医学における例

ここ数年来、周産期医学を扱っている図書の増加が目立つようになって来ていることは、周知の通りである。周産期医学は出生前後の児を対象とするところから、産科学と小児科学の二学問分野から発生し、その研究方向は多岐に渡って拡大されながらも、次第に一つの新しい学問概念として定着し確立されつつある。その為、それらの図書を産科学、小児科学、或いはその他の関連分野のいずれか一ヶ所に分類するには、大きな抵抗があることが予測される。反面、周産期医学という項目を新たに設けるには、その質、量の双方においてまだまだ不十分な点も少なからず、現在 MeSH 上にも周産期医学(perinatology)という件名、若しくはそれに相当する件名を見出すことは不可能である。

従って、周産期医学が新たな学問分野として独立し発展するまでの間、当分は既存の分類体系に則して分類せざるを得なく、図書館と利用者の双方に納得のいく分類構成を行なっていくには、なかなか困難な状況にある。そこで先例と同様、C. C. 上における分類傾向を探り、そこに見られる処理方法を模索してみた(図6)。

(1) MeSH 上での位置づけが不明瞭なために惹起される問題は、C. C. に収録されているこれらの図書が、相対的に多くの件名を与えられていることである。これは、周産期医学の学問分野を全体的に包含する件名が未だ取上げられていないために、やむなく他の分野における関連性の強い件名を与える以外になく、図書が有している主題との間に生じるアンバランスは、勢多くの件名を付与するという形で補われるためであろう。

[例えば]

Stevenson, Roger E.

The fetus and newly born infant: influences of the prenatal environment. St. Louis, Mosby, 1973.

に与えられた件名は、(1) Embryo (2) Fetal diseases (3) Fetus (4) Pregnancy complications (5) Prenatal care と総数5件であるが、これは即ち、同種の内容を有する図書を任意的にサーチしたい場合、少なくとも5件の件名からのアプローチを必要としなければならないということでもある。

索引上に限らず分類上においても同様であり、往々にして分類上の不統一、書架上の散乱を来たしがちである。特にオープン書架の場合、ともすれば、周産期医学について出来るだけ多くの図書を収集しようと思う利用者は、多領域に渡る関連分野の書架間を往復し、日頃の数倍の労力を費さなければならないということにもなりかねない。このような分野の図書に対しては、常に一定の分類方針を保つべく細心の注意を払う必要があり、時には思いきった分類体系の改良策を講じることもやむを得ないであろう。

(2) 周産期医学における基礎的段階として解剖学、発生学、生理学等の立場から著わされている図書は、各々の学問分野の下に分類されている。つまり、周産期医学の範ちゅうから見れば、胎児の影響を素因側から研究する立場の図書として当然一括してまとめられるべき筈のものが、分類表の現状から、胎児或いは新生児と明確な対象がある場合においても、学問体系に準じて解剖学、発生学、生理学等に分散されてしまう。(既に述べたが、各器官、身体系のもは主題の下に図書が集中する方法をとっているに対して、WS (小児科学)の項目においてはその解剖、生理について、特にそれぞれの学問分野に収めるよう指示されている。

[例]

- 1) Basic human anatomy as seen in the fetus. → QS 4 (Anatomy, General)
- 2) Les preniert jours de la vie. → QS 604 (Embryology, General)
- 3) Birth defects and fetal development; endocrine and metabolic factors. → QS 675 (Embryology > Congenital abnormalities)
- 4) Fetal and neonatal Physiology. → QT 4 (Physiology, General)

(3) 同一主題(出生前後の児)を有する図書が、産科学と小児科学とに分割分類されているが、そのなかでも総論や病理学的立場を扱ったものは産科学へ、個々の疾患やその治療を扱ったものは小児科学へと分類方針の統一が保たれている。

[例]

- 1) Neonatology; diseases of the fetus and infants. → WS 420 (Pediatrics > Newborn infant)
- 2) Metabolic process in the fetus and newborn infant. → WS 420

図6. 「Perinatology」分類基準体系表

3) Fetal and neonatal pathology. → WQ 210 (Obstetrics>Fetus)

4) Physiology and pathology in the perinatal period. → WQ 210

(1),(2)に見られる傾向は、同一研究分野の図書として包括する概念の下に一括分類されることが望ましいが、分類表自体にその概念を示す適当な項目が設けられていないために、このような整理方法を取らざるを得ないのが現状であり、同時にこれは図書分類という作業が有している一つの限界点であるとも言えよう。それに対して、(3)における整理の方法は暫定的ではあるが非常に賢明な措置であると思われる。既存の分類表だけではどうても対応しきれない医学の新用語、新領域に対して、一つの方針を定めそれに従って図書の分類構成を行なうことは、膨大な蔵書の山から目的とする図書の位置を的確に指示し、利用者のとまどいを出来る限り少なくするためにはなくてはならない図書館側の智慧でもある。このような考案や選択は、急テンポな現代医学に対峙していかなければならない医学図書館として、近年特にその必要性が強く認識されてきており、その効力は今後増々発揮されていくであろうと思われる。

最後に、これらの新しい領域、境界領域等の図書に対して、分類上の不統一や書架上の分散という事態を避けるためには、分類に当たり(1)分類における観点を統一する、(2)出来るだけ関連の深い項目に収める、ということに留意し、他方では(3)チェックリストを活用する、(4)参照カード・参照板等により書架分類の弱点をカバーする等の工夫が必要であることを再確認しておきたい。

6. おわりに

以上、医学図書の分類業務が孕んでいる種々の問題点を取上げて検討を行なってきたが、これらの問題の中でも、件名目録の整備や充実によって図書分類のもつ宿命的な機能上の限界や欠点を補い得る面も多々あろう。しかしながら、日本においては未だに MeSH に匹敵するような標準件名標目表が存在していないため、専ら分類目録で代用されているというのが現実である。医学図書館に働くカタログガーの一人として、この機会に標準件名標目表の早急な編纂を望みたい。

本田氏の米国見聞記によると、「目録作業は極力簡易化されており、オリジナル・カタログを行っている所はほとんどなく原則的には NLM Current Catalog とそのプルーフシート、LC Catalog とそのプルーフシート等によりサーチしている。」⁽¹⁶⁾と述べられているが、今や日

本でも多くの図書館がその方法を見習いつつあり、将来は目録作業のみならず分類作業の集中化にもより工夫が講じられ、各館が分類にわずらわされるという事態がなくなる日もそう遠くはないと期待する。しかし、そのためにはそれによって新たに惹起されるであろう種々の問題点に應ずることなく、常に新しい地点から分類作業を再考し得る柔軟性を保持することが必要であろうし、他方では単に分類作業を他に依存して労力を省くということで終らせることなく、常に利用者のための分類であるということを念頭に置いて、地道な努力を積み重ねていくことも要求され続けるであろう。

(本論文は 1975 年度第 5 回関東地区医学図書館合同研究会において発表した要旨を加筆修正したものである。

文責 平井昭子)

参 考 文 献

- 1) Scheerer, George: Classification systems used in medical libraries. Bull. Med. Libr. Assoc. 62(3): 273—280, 1974.
- 2) 海老原正雄, 細木朗子: 実用分類めぐり (医学—医学図書館を中心として). 情報管理 9(3): 146—151, 1966.
- 3) 藤門薫: 各種分類法の実例—NDC の場合—. 医学図書館 11(3): 135—139, 1964.
- 4) 石山洋: 資料分類と目録 1 分類法. 情報管理 18(13): 1001—1007, 1976.
- 5) 近藤利夫: 医学書整理諸の問題 2 長崎大学図書館の例. 医学図書館 17(3): 165—171, 1970.
- 6) 村上弘: 各種分類法の実例—UDC—. 医学図書館 11(3): 130—132, 1964.
- 7) 中野国治: 医学書整理の諸問題 1 九州大学医学図書館の例. 医学図書館 17(3): 161—165, 1970.
- 8) 中山いほ: 医学書整理の諸問題 4 千葉大学医学図書館の例. 医学図書館 17(3): 177—180, 1970.
- 9) 西山亭: 各種分類法の実例—NLM 分類表—. 医学図書館 11(3): 122—125, 1964.
- 10) 新潟大学医学図書館: 各種分類法の実例—BMLS における事例研究—. 医学図書館 11(3): 126—129, 1964.
- 11) 大橋京: 分類法一般. 医学図書館 11(3): 117—121, 1964.
- 12) 松村多美子: MeSH とその使い方, 日本ドキュメンテーション協会: シンソーラス入門. 1970. p. 34—47.

- 13) 後藤敬治: Medlars II —MeSH Tree Structures
(1975)におけるサブカテゴリーの追加と変更. 医学図書館 20(3): 267—282, 1973.
- 14) JICST 情報部 高野: 海外雑誌あらかると(分析化学). 情報管理17(9): 705—709, 1974—75.
- 15) 坂本正一: 周産期管理の発展のために. 周産期医学 5(1): 3—5, 1975.
- 16) 本田品子: 米国医学図書館協会 Fellowship による研修を受けて一報告. 医学図書館20(1): 71—77, 1973.

(昭和51年11月30日受付)